

ヨーゼフ・ロートとガリツィア

佐 藤 方 代*

Joseph Roth und Galizia

Michiyo SATO*

はじめに

ヨーゼフ・ロートの新しい全集の刊行が、クラウス・ヴェスターマンの編集によって、1988年から始められ、昨年（1991年）完結した。¹⁾

1933年の亡命から死の年（1939年）までは、主としてアムステルダムにおいて、いくつかの作品が出版されただけであった。第二次大戦後、1950年代になっても、ロートへの関心は、他の亡命作家に比べて大きくはなかった。60年代になって、『ラデツキー行進曲』（1964年）が映画化された頃から、研究書が数多く見られるようになり、読者の関心も集まったが、必ずしも十分な理解を得ていたわけではなかった。²⁾

亡命先のパリで客死したロートの作品が、まとまった全集として出版されたのは、1956年、ヘルマン・ケステンの編集による3巻本が最初であった。この全集は、新版の「編者前書き」によれば、長い間、収集家や研究者の手に入りにくい状態にあった。次いで1975年～76年に、やはりケステンの編集した4巻の全集が出たが、この版も予想より短期間のうちに品切れとなったとのことである。³⁾

今回の全集は、その後に発見された資料を加え、ジャーナリストとしての仕事（1～3巻）と、小説・物語の分野（4～6巻）とに分けて、それぞれ年代順に並べられ、全6巻からなっている。この全集によって、フィクション、ノンフィクションともに、執筆順にテキストを辿ることが容易となり、ロートの作品と生涯の全体像を見渡すことができるようになったのである。

ヨーゼフ・ロートは、1894年東ヨーロッパのガリツィアでユダヤ商人の家に生まれ、そこで少年期を過ごした後、第一次大戦前夜にヴィーン大学で学んだ。1920年代にはジャーナリストとして活躍し、小説家としても成功をおさめながら、ナチスが政権に就いたためフランスに逃げ、パリで44才の短い生涯を閉じた。

ロートの文学は、東ヨーロッパへの近親感と、民族主義に対する憎しみが基調となっている。そして、民族や国家を超えた汎ヨーロッパ世界への憧れを、古いオーストリアとハプスブルグ帝

*外国語系列 (Department of Foreign Languages)

国に託して書き綴る。その中で彼は、さまざまな形で生まれ故郷のオーストリア・ハンガリー帝
国領ガリツィアを描いている。本稿では、二つの作品『いちご』および『皇帝の胸像』にそって、
ロートのガリツィアへの関わりを見ていきたいと思う。『いちご』は草稿のみ残された断片であり、
『皇帝の胸像』は、生前フランス語に訳されたものだけが公刊された短編小説である。『いちご』
の草稿は1929年に書き始められ、『皇帝の胸像』は、亡命後（1935年）の作品である。

作品に触れる前に、ロートの生涯の前半、東方ユダヤ人の家に生まれてから、ウィーンの大学
で学ぶまでの、ガリツィアにつながる生活を跡づけてみる。

ガリツィアの少年時代（ギムナジウム卒業まで）

ロートは、彼の作品を数多く出版しているグスタフ・キーペンホイアーに宛てた手紙の中で、
「わたしは1894年9月2日、ヴォルヒニアのちっぽけな村で生まれました。⁴⁾」（1930年6月10日
付）と記している。

1974年にロートの克明な伝記を著したダヴィッド・ブロンゼンは、上記の手紙を、「幻想に満ち、
潤色をほどこした手紙⁵⁾」と呼んでいる。ブロンゼンによれば、ロートはガリツィアのプロディー
で生まれたのであるが、ここに記された誕生の日付はプロディーのユダヤ人戸籍簿への記載の日
によるもので、必ずしも正確だとは言えない。また、かつてのポーランド王国にヴォイニ（ドイ
ツ語でヴォルヒニア）という名の地区があるけれども、プロディーがヴォルヒニアと呼ばれたこ
とはないとのことである。⁶⁾ ロートはしばしば、自分の生地に曖昧な名を与えていた。そのため、
ヘルマン・ケステンさえも『わが友なる詩人たち』の中で、ロートの生地を、本人の言葉そのま
まに「ヴォルヒニア」と記している。⁷⁾ いずれにしても、ロートが、実際にはガリツィアのプロ
ディーの市中に生まれたことを、ブロンゼンが検証している。

母親は正統派ユダヤ人の織物商イエヒエル・グリューベルの娘マリア・グリューベル、父親は
西ガリツィア生まれのユダヤ人で、ハンブルグの輸出商社員として穀物や材木の買い付けをして
いたナフム・ロートであった。

母親について、同じ手紙の中でロートは次のように述べている。

「わたしの母は逞しく現実的で、スラブ的なユダヤ女性でした。彼女はよくウクライナの歌
を唄っていました。とても不幸せだったからです。（私たちのところでは、家で歌を唄うのは、
西の国々のように幸せな人たちではなくて悲しい人びとでした。だから東方の歌はいっそう美
しく、心ある人が聞くと泣きたくなってしまうのです。）母は、お金もなく、夫も居ませんで
した。というのは、私の父はある日彼女を西に連れ出したのですが、それはただ私を身ごもら
せるためだけのようなものでした。彼女をカトヴィッツに一人で置き去りにして姿を消し、二
度と帰って来ませんでした。⁸⁾」

ここに記されたように、ロートは父親とは、生涯一度も会っていない。ロートの両親は、1892年
にプロディーのシナゴークで結婚式を挙げた。1年半の後、妻を伴って商用の旅に出たナフム・

ロートは、カトヴィッツに彼女を置いてハンブルクへ向かい、その帰途、ハンブルクとベルリンの間で、異常な振舞いのため列車から降ろされ、精神病院に収容された。ロートの母は実家に帰ってロートを生んだが、父親は二度と帰ることがなかった。ロートは母から、父は生きていないものと聞かされていたが、実際に亡くなったのは1910年であった。

ロートは、プロディーの祖父のもとで母親の手で育てられた。正統派ユダヤ教徒であった織物商人の祖父が1907年に他界するまで、ロートの母親がその家の家政をみていた。

ブロンゼンによると、ロートは、ゲッターではないが閉鎖的なユダヤ人居住区で過ごした。⁹⁾ 経済状態について、ブロンゼンは、当時を知る人びとにインタビューをして、ロート母子の生活ぶりを尋ねている。それに対して、みすばらしい身なりをしていたとする答えがある一方で、後見人から生活に困らない援助を得ていたとの証言があった。ブロンゼンが調べたところでは、母親が小間使いを雇ったり、息子にヴァイオリンなどを習わせたりしたので、服装にお金を費やすことができなかったためであろうしている。¹⁰⁾

ロートは1901年から1905年まではプロディーの「バロン・ヒルシュ小学校」（ユダヤ人学校）に通った。そこでの授業は通常ドイツ語であったが、特別な科目はポーランド語とヘブライ語が用いられた。1905年から1913年まではやはりプロディーの、「ルドルフ皇太子ギムナジウム」の生徒となった。当時のガリツィアでは、レンベルク（現在ウクライナのルヴォフ）のギムナジウム以外にドイツ語で授業が行われていたのはここだけであった。他では、ポーランド語が用いられていた。

ギムナジウムの頃のロートと母親について、ダヴィッド・ブロンゼンのインタビューに答えた当時の級友アブラハム・パルネス（エルサレム在住）が、65年前を思いだして、次のようなことを言っている。

「ヨーゼフ・ロートはギムナジウムで、カトリックの生徒ともユダヤ教の生徒とも、ほとんど交際をしていませんでした。私もたいしてつきあって居たわけではありませんが、それでも、ときどき言葉を交わしたのは私の他にいなかったのかもしれませんが。あるとき彼の家へ招かれたことがありました。第5学年、彼が16才の頃のことです。あの時の訪問は忘れられないものでした。ロートは大きな部屋に私を迎え入れました。・・・ロートのお母さんは、立派そうな、近寄り難い様子をして、部屋の中を行ったり来たりしていました。私には全く注意を払わず、一度も挨拶をしませんでした。それは不気味な印象をうけました。ちょうど読んだばかりだったグリルパルツァーの「祖先の女」を思わずにはいられませんでした。町では、ロートのお母さんは引きこもって生活し、息子以外にはだれも寄せ付けないといわれていました。¹¹⁾」

この話からは、現実の生活の中で、ロート母子が土地に溶けこんで暮らしていたようには感じられない。マリア・クアニスカの言うように、ロートが「地方の偏狭さと母親の細かな気遣いから脱して「大きな世界」へ¹²⁾」憧れていたとしても不思議ではない。ロートはギムナジウム時代に、文筆家になるという希望を繰り返し伯父や従姉妹たちに書き送っている。¹³⁾

ヴィーンへ

1913年にギムナジウムを卒業すると、レンベルクの大学に入学手続きをしたものの、その年の内にヴィーン大学へ移籍している。まもなく、短い物語、エッセイ、詩が「Österreichs Illustrierte Zeitung オーストリア挿絵入り新聞」に掲載されるようになり、最初の短編小説も同紙に（1916年）発表している。

ヴィーンに移って間もなく、同郷のヨーゼフ・ヴィトリン¹⁴⁾と知合い、大学内やカフェで語り合うなど、学生生活をともにしている。第一次大戦にもいっしょに志願して（1916年）従軍した。

ヴィトリンによれば、ヴィーンに出てきた頃のロートは、主に叙情詩の創作を試みていた。ロートの叙情詩は、ごく一部が新聞紙上などに発表されただけであったが、ヴィトリンは未発表のものを数多く手元に残していたとのことである。

「残念なことに、ワルシャワの私の住まいに置いてあったロートの詩の草稿の多くが爆弾¹⁵⁾の犠牲になりました。その中には、ロートがよく普通の葉書に書いてよこした短い叙情的な詩などもありました。それらの詩は、ウクライナの民謡のようなメロディーをもったものでした。後になってロートは、叙情的な青年時代の詩を恥ずかしく思ったため、それらは公にされませんでした。¹⁶⁾」

そうした詩のうち、「オーストリア挿絵入り新聞」（1916年6月2日付）に載ったものの一つをみると、次のように、素朴な感傷が民謡風に歌われている。

Wo?¹⁷⁾

Ich war einmal ein kleines Kind,
Das angstgequält zur Mutter floh,
Wenn durch den Schornstein fuhr der Wind
Ich weiß nicht, wo ...

Ich hab' einmal gehört ein Lied,
Das klang so zart und müde so,
Als ich von meiner Heimat schied, ...
Ich weiß nicht, wo ...

Es hat einmal mein Herz gelebt, ...
Mohnblumen brannten lichterloh, ...
Ich hab' einmal ein Glück erlebt, ...
Ich weiß nicht, wo ...

何処で？
昔、私は小さな子供で、

煙突から風が吹き抜けて来ると、
不安でたまらず母のもとへ逃げて行きました
どこでのことかは、わからない

昔、歌が聞こえました
それはやさしく疲れた響きで
私がふるさとから別れたときのようにでした
どこでのことかは、わからない

昔、私の心は生きていました
ひなげしが炎のように燃え、
昔、幸せだったのです
どこでのことかは、わからない

各節それぞれの、通俗的な素材と表現によって昔を懐かしむ甘い調子は、かつて母親の口ずさんでいた民謡を思わせ、少年時代のイメージに結びついている。ヴィーンで、作家達に混じって活動するようになってからも、故郷を同じくするヴィトリンに、折りにふれこのような詩を書き送ったのであろうか。

ロートが本格的な文筆活動を始めたのは、第一次大戦が終わった後しばらくしてからのことである。1920年にはベルリンに移り住んで、主としてジャーナリストとしての活動に携わるようになった。1924年に発表した長編小説『サヴォイホテル』によって、作家としての地位を確立し、20年代には多彩な活動を繰り広げるが、すでに早くから、迫り来る狂気の時代を予感していた。1933年ナチスが政権を握ると、亡命を余儀なくされ、絶望的な状況のなかで酒に浸って命を縮め、1939年パリで44才の生涯を閉じたのである。

ガリツィアに生まれ、世紀末文化の担い手達が集まっていたヴィーン、「黄金の20年代」のベルリンを経てパリまで、短い生涯の軌跡は、ヨーロッパの東の端から西の端にわたっている。

創作活動の出発点となったヴィーンは、「父親もなく指導してくれる人もなしに育った、プロディー生まれの、資産もないユダヤ人にとって、偉大な世界だった。¹⁸⁾」それでも次第に「スタイルもレベルもそれまでに知っていたものに比べて高貴で洗練された世界¹⁹⁾」に馴染んでいく。しかし、創作のもっとも深い源であるガリツィアは、繰り返し作品に登場する。「どのような変化が用意されても、ガリツィアに結び付いたユダヤ的本質は振るい落とされることはなかった²⁰⁾」のである。

ガリツィア

ガリツィアは当時オーストリア・ハンガリー帝国の東の端に位置する帝室直轄領であった。1772年のポーランド分割によりオーストリアに組み入れられた領域である。ロートが生まれたブ

ロディは、東ガリツィア（現在のウクライナ）の小都市であった。ガリツィアの政庁所在地レンベルク（現ルヴォフ）から北へ90キロ離れた、ロシア国境に近い町で、周辺地域の中心をなしていた。第一次大戦の前は、ユダヤ人が住民の3分の2以上を占め、ポーランド人、ウクライナ人（オーストリア・ハンガリー帝国支配下ではルテニア人と呼ばれていた）、ドイツ人が住んでいて、オーストリア軍の駐屯地があった。

1879年までは自由貿易都市であったことから、商業の盛んな町であり、さらには、オーストリアの交易と物資の積み替え地点ともなっていた。そのため、多民族の文化が混じり合って独自の展開を遂げていたともいわれている。東方ユダヤ人の精神的中心でもあった。路上では、ドイツ語、ポーランド語、ウクライナ語、イディッシュ語が話され、ロシア語もしばしば耳にすることができた。しかし、ロートが子供時代を過ごした頃のガリツィアは、すでに停滞した町であり、「偏狭と寛容、保護と危険が同時に息づいている世界」²¹⁾であった。

クアニスカは、ロートの作品の中のガリツィア像を分析し、それが二つの異なった面を持っていることを指摘している。一つのイメージは、「失われた故郷」を表している。それは、ハプスブルグ帝国を象徴とし、多民族が共存して暮らす理想の土地として描かれるものである。もう一つのガリツィアは、「帝国の崩壊過程が、どこよりもむきだしにはっきりと目に見える場所」²²⁾を意味している。ガリツィアは、ヴィーンから見ればもともと辺境の地であり、人びとは常に没落の脅威と危険に曝され、ユダヤ人に対するポグロム（組織的虐殺・略奪）や、民族的・社会的緊張の絶えない所なのである。ロートにとっても、懐かしい故郷である一方、よそよそしい土地でもあるという、二重の意味をもっていたに違いない。

ロートの作品に登場するガリツィアのイメージは、すこしずつ揺れている。その揺れは、上に述べたような、ロートのアンビバレントな思い入れによるものと考えられる。

ここで、ガリツィアの厳しい風土と貧しい人びとをリアルに描写した未完の小説『いちご』と、逆に、ガリツィアの架空の小さな村を、多民族共存のユートピアとして描いた『皇帝の胸像』を取り上げ、ロートのガリツィアに対する二重のイメージを追ってみることにする。

『いちご』

『いちご』は、東ヨーロッパの小さな町を舞台にして、ロートの自伝的な作品として計画されたが、はじめの部分の草稿が残されただけであった。ブロンゼンが、不明確な文字を出来る限り判読し、明らかなタイプミスを訂正して、「TEXT-KRITIK」のロート特集号（1982年）に、はじめて掲載したものである。

冒頭で、ガリツィアの地形が描写される。

「私が生まれた町は、ヨーロッパの東にあって、広い平野に人が疎らに住んでいた。東の方は限りなく広がっていた。西の方は、晴れた夏の日にだけ見渡すことができる、青々とした丘陵に囲まれていた。²³⁾」

そこに住む人びとの暮らしは、牧歌的であり、しかも無政府状態に近い。

「私の故郷ではだれも証明書を要しない。裁判所や、刑務所や、弁護士や、税務署は存在する。——しかし、身分の証明などどこでも必要がない・・・大事なことは、役人が生活できるということなのだ。彼らは、賄賂によって生活している。だからだれも刑務所へ入らない。だれも税金を払わない。だれも証明書をもっていない。²⁴⁾」

さまざまな民族が混じり合い、平和が保たれているかのようにみえて、

「しばしば小規模なボグロムが起こった。いろいろな出来事に粉れてそれらはすぐに忘れられた。死んだユダヤ人が葬られ、奪われたユダヤ人は損害を被ったことを否定した。²⁵⁾」

物語は、主人公の1人称の形で進められる。「私」は8人兄弟で母親はすでに亡くなっている。2頭の馬を持ち、ホップ商人めあての馬車屋を営む父親は、大酒飲みで週に一度しか家に帰って来ない。そしてある日、零下35度の寒さの中で酒に酔って櫓から落ち、凍死してしまう。8人の兄弟は、それぞれ、1番目はボクサー、2番目はオデッサの港湾労働者になった。3番目は兵士になって死亡、4番目は村の鍛冶屋のもとに弟子入りし、5番目はベテルスブルクで爆弾の製造に携わり、爆発で命を落としてしまう。6番目は1917年に戒厳令下で撃ち殺された。7番目はメキシコで歯の技工士になっている。彼はガブリエルという名で、結婚していて、1年に2度「私」へ手紙をよこすのである。

この兄弟達の境遇は、当時のガリツィアの男達に実際に起こった出来事を写し取ったものであるろう。

兄弟達が世界の各地へ去って、「私」だけが町に残り、結局のところ、墓守りパンタレイモンの家へ転がり込むことになる。その間に「私」の身に起きたエピソードがこまごまと描かれるなかで、この町の粗野で貧しい日常が浮かび上がってくる。至るところに死が見られる。そうした中で、「私」は、「世界への旅に出たい」と考えるようになった。

町の近くの城に年取った伯爵が住んでいて「われわれの伯爵さま」と呼ばれている。パンタレイモンは、伯爵の「たった一人の友達」である。伯爵は金曜日には貧者にお金を恵む習慣になっている。

ある時ホテルの建築が始まって、人びとに仕事ができたかにみえたが、出来上がったホテルに客は来なかった。

「私たちの町は貧しい。住民には定まった収入はない。彼らは奇跡によって生きているのだ。

.....

冬が殺人者のように私たちに襲いかかる。11月の終わりにはもう零下25度にもなる。

.....

貧しい人びとは伯爵さまに食事を恵まれる。しかし、もの乞いを許されない人たちは飢えて死んだ。²⁶⁾」

とりわけ厳しいその冬、もはや耐えられないように思われたとき、金持ちの茶商人が北京からやって来て、皆が救われることになる。彼は馬車に乗り利用者のなかったホテルに泊まって町に金を

もたらした。施しをし、いささが疲れて去っていく。彼のおかげで稼いだ金で、町の人びとは宝さがしのための装備を買い整えた。町の通りの地中に、昔の戦争の時代の金銀財宝が埋められていると言われていたのだ。皆が熱中したにもかかわらず、だれも宝を掘り出すことはできなかった。ある日、助手を伴った歴史学の教授が、ランタンやガスマスクを携えて来て、勇敢な人夫を募集する。墓掘りに慣れたパンタレイモンと「私」は、前金を受け取って参加した。地下の異臭はすさまじく、財宝のかけらもなかったが、「私」は、この仕事によってまとまった額の金を手にしたのであった。

この物語の展開はここで、中断している。ブロンゼンによれば、草稿は読み取ることが困難な部分も多く、単純な表記の誤りもあって、文字どおり素描で終わっている。²⁷⁾ 1929年に書き始めて中断し、1935-36年頃の手紙²⁸⁾ で本格的な執筆を何度か予告しているが実行されないまま、はじめの部分の草稿のみが残されたのであった。

『皇帝の胸像』

『いちご』を中断したよりも後の作品である。この作品は、1934年にフランスで発表された。ドイツでは、死後15年を経た1964年に初めて散文集に収められた。

物語の舞台である「ロパティニー村」は、『いちご』の「私の生まれた町」と共通の枠組みを持っている。ガリツィアにあって国境近くに位置し、さまざまな民族が住んでいる。帝国領とはいえ、役所は人びとの日常生活にほとんど関わりをもたず、実際には機能していない。

ロパティニー村には、一人の伯爵が住んでいて、貧しい人への慈善を習慣にし、困っている村人のため、問題の解決に大きな力を発揮する。すべての官庁に働きかけて意志を通し、税金をまけさせたり、病弱のユダヤ人子弟の軍務を免除させるようなこともした。彼は村人達に慕われ、なんの力も持たぬユダヤ人の一人と「友達付き合い」をしている。

以上のように、『皇帝の胸像』の場所と人物配置は、『いちご』と共通している点が多い。しかし、全体の色調は、全く違ったものとなっている。ここで、『皇帝の胸像』の内容を少し詳しくたどり、その違いを明らかにしてみる。

『皇帝の胸像』は、語り手が、第一次大戦後に「今日ではポーランドの一部であるが、かつての東ガリツィア、プシュミスとプロディーの間を通る鉄道から離れたところにある小さな村」の話をするという構成になっている。『いちご』と異なり、ガリツィアの貧しさや、厳しい現実の争いや死にまつわる具体的な描写は見られない。冬の寒さも、あっさりと触れられるだけである。逆に、ガリツィアを、さまざまな土地にさまざまな民族がハプスブルクの旗のもとに融和しフランツ・ヨーゼフ皇帝を戴いて平和に暮らす調和的世界として描き出している。

「なるほど、国ごとに歌がちがいが、国によって農夫の仕事着もちがっていたし、どの国でも一つ、またはいくつかの別の言葉が話された。²⁹⁾」そんななかで主人公を喜ばせたのは、どこへ行っても「黒と黄二色のハプスブルクの旗」が翻り、「皇室賛歌」が聞こえることだった。

主人公は、この村に住むフランツ・クサーヴァー・モルスティン伯爵である。彼の一族は、イタリアから出て16世紀にポーランドにきた貴族であった。しかし、本人は、自分をポーランド貴族とも、イタリア系の貴族とも思っていない。

ロートは、このハプスブルク帝国の貴族である主人公を、「超民族的な世界市民」の理想を具現する人物として描き出している。

「オーストリア＝ハンガリー君主国傘下のかつての王国には、どっさりこの手の人物がいたものだが、もっとも高貴にして、つゆまじりつけのない純オーストリア人の一人であった。すなわち、超国家的の人間であって、これぞまことの貴族というもの。³⁰⁾

「たとえば彼にたずねたとしよう・・・あなたはそもそも「何国人」であって、どの民族に属すると考えるか。伯爵はわけがわからない、といった顔をするだろう。・・・いったい、いかなるしるしにもとづいて自分の帰属する国を定めるべきなのか・・・彼はほとんどすべてのヨーロッパの言葉を、いずれ劣らず流暢に話した。ほとんどすべてのヨーロッパの国々がわが家も同然だった。・・・この点、オーストリア君主国自体がヨーロッパのミニアチュールであって、だからこそ伯爵の唯一の故里だった。³¹⁾

言うまでもなく、これは歴史的事実とはかけ離れた見方である。クアニスカも、ロートの作品に登場するポーランドの貴族が保守的でコスモポリタンな人物像であるのは歴史的に見て誤りであり、1772年のポーランド分割以来、彼らが独立の夢を持ち続けていたことや、第一次大戦後のオーストリアからの解放を、感激をもって迎えた事実を無視していると指摘している³²⁾『皇帝の胸像』に関しては、ヴィトリンがブロンゼンのインタビューに答えて述べたところによると、実在のポーランド貴族モルスティン一族に連なる詩人が、事実反して家名を使われたのを非難するという出来事があった。³³⁾ 実在のモルスティンは、大戦後独立したポーランドの再建のために尽くしたとのことである。

ロパティニー村のモルスティン伯爵は「高貴で公正な権力者」の役割を演じ「高位の者への信頼と服従、位階制への信仰」を感じていた。そして「皇帝を、人間的な特徴によってではなく、皇帝という特質ゆえに敬愛した」のである。世界大戦の数年間、大演習のためにフランツ・ヨーゼフ皇帝がロパティニー村の伯爵のもとに逗留することになって、伯爵はおおいに興奮する。その時の記念に近く農夫の息子が造った皇帝の胸像を屋敷の前に据え付けさせた。

「そのころ、モルスティン伯爵はもはや若くはなかった。・・・屈強な貴族仲間の目には中年すぎた変わりものの独身男というわけで、多少とも「滑稽」で「別世界の人間」といったところが通り相場だった。身邊に女性がいたためしがない。彼自身、結婚を考えた気配がない。酒を飲んでいるところも、トランプに興じているところも、愛し合っている姿も見たためしがない。ひたすら「民族自決」の声を制圧するのに情熱をそそいでいた。³⁴⁾

そうした中で、世界大戦が始まり、伯爵は志願して参加する。戦争が終わって、オーストリア君主国は消滅した。伯爵は帰還するが、ロパティニー村は、新しく誕生したポーランド共和国に属することとなった。ハプスブルク帝国は消え去り、伯爵は存在の基盤を失ったように感じて落ち

着かず、スイスへ旅に出かける。ところが、チューリヒの夜のバーで、帝冠がおもちゃにされている光景に出会い、世界が変わってしまったと知って、ロパティニー村に戻って来る。ロパティニー村だけは、全く昔のままであった。伯爵は、フランツ・ヨーゼフ皇帝の胸像をまた屋敷の入口に据え付ける。しかし、「以前は、レンベルクと、ドイツ名であったが、新政府に入り、ヴォイデオーデ・フォン・ルヴォフと改名した人物が³⁵⁾」視察にやって来て、胸像をみて驚き、取りかたずけるように指令を出した。

そこで伯爵は、皇帝の胸像の埋葬式を行おうと考え、ロパティニー村の古い住人を前に、「当局の指定に従って胸像を除去するのではなく、・・・古い時代が死んだのであれば——葬ろう³⁶⁾」と演説する。

ウクライナ人の指物師が棺を作り、ポーランド人の鍛冶屋が真鍮の飾りを彫って鋳で留め、ユダヤ人の聖書筆写生が祈祷文を書き棺に収めた。ギリシャ・カトリックの司祭、ローマ・カトリックの司祭、ユダヤ教の司祭を先頭に、村人たちが墓地に集まった。

抜きはなったサーベルをかざして棺のうしろを歩くモルスティン伯爵に、「ユダヤ人で彼の友である」ザロモンが従って行く。

この埋葬の場に描かれた人物像は、ガリツィアを構成する階級と民族のアレゴリーとなっており、この胸像の葬送の場面全体が、ロートの夢みた民族融和のアレゴリカルな絵図に他ならない。というより、「ロパティニー村」そのものが、ガリツィアの「すべての社会的、経済的、民族的現実を無視して³⁷⁾」描き上げた多民族共存のアレゴリーである見ることができる。

最後に主人公は次のようなことを書き記す。

「民族は甲斐もなく、個人の美徳よりももっとも疑わしい国家の美徳を求めている。だからこそわたしは国家、しかるべき民族国家を憎むのだ。³⁸⁾」

モルスティン伯爵の「民族国家」への憎しみは、民族主義へのロートの憎しみの反映である。かれは、生涯一貫して民族主義を憎み、国家や民族を超越した、国境のない世界を理想としていた。ユダヤ民族主義であるシオニズムにも激しく反対した。『放浪のユダヤ人』では、シオニストが「ヨーロツパ諸国とはほとんど変わりのない形をしたユダヤ人国家を目指している³⁹⁾」ことを非難している。

「国家や祖国は、その文化的特性を維持することを目的とするものであったとしても、そのために一人の人間の生命を犠牲にする権利など持っていないはずである。ところが実際には、もっとそれ以上のものを欲する。・・・ユダヤ人は、これまでに生きてきた千年の歴史に亘る苦悩の全期間を通して、唯一つの慰め・・・すなわち、そのような祖国を持たないという慰めだけを持っていたのである。⁴⁰⁾」

おわりに

ガリツィアは、歴史上の変動が起こるたびに幾度も所属する国が変わった地域である。そうし

た場所では、国境は恣意的に引かれた線に過ぎないというのが実感であろう。しかも、さまざまな民族が混じり合って住んでいるため、それぞれが民族国家の立場に固執していたのでは、平和に暮らすことは不可能である。そこでは、国家、民族の立場を超えたいと願うことは、生きるための必要に迫られた選択であるとさえいえる。ロートの、民族主義への反感、民族国家を超越した世界への憧れも、抽象的な理念ではなくて、ガリツィアへの思いに深く結びついた具体的な選択なのではないだろうか。それゆえ、オーストリア支配下のチェコやポーランドの場合のような、解放の理念としての民族主義を理解することはできなかったのではないだろうか。

ロートは亡命生活の中で、ドイツ民族主義が醜く肥大したナチスの脅威がヨーロッパを覆いつつあるのを目のあたりに見て、意識的に、消え去った多民族国家ハプスブルク帝国への傾斜を強くしていった。追いつめられたロートが、さまざまな民族が混在した故郷ガリツィアを振り返ったとき、そこに、『いちご』で意図した、民族紛争の絶えない現実の姿を描き出すのではなく、『皇帝の胸像』のロパティニー村のような、多民族融和の夢を描いたのだった。ロパティニー村は、現実のガリツィアの、まさに裏返しの姿である。現実の姿をリアルに写し取った『いちご』は、未完の草稿のままで残された。作者が亡命生活に耐えて生き延びたとしたら、それが書き継がれることになったかもしれない。

[注]

- 1) Westermann, Klaus(Hrsg.): Joseph Roth Werke 1-6, Köln(Kiepenheuer & Witsch), Amsterdam(Allert de Lange), 1988-1991 以下各巻をJ. Roth Werke 1 のように略す。
- 2) Scheichl, Sigurd Paul: Rezeption oder Rezeptionsdefizit? Das Werk Joseph Roths in der Zweiten Republik(1945-1965), In: Kessler, Michael/ Hackert, Fritz(Hrsg.) Joseph Roth, Tübingen(Stauffenburg Vlg.), 1990 参照
- 3) J. Roth Werke 1 (1988) Hackert および Westermann による前書き (1988) 参照
- 4) Kesten, Hermann: Joseph Roth Werke in drei Bänden, Köln, Berlin(Kiepenheuer & Witsch), 1974, s.833
- 5) Bronsen, David: Joseph Roth/Eine Biographie, Köln(Kiepenheuer & Witsch), 1974, s.43
- 6) ibid. s.44 参照
- 7) Kesten, Hermann: Meine Freunde, die Poeten, (Gekürzte Ausgabe), Frankfurt a. M.(Ullstein), 1980, s.161
- 8) 注4) に同じ
- 9) Bronsen, D. 前掲書 s.46 参照
- 10) ibid. s.57 参照
- 11) Bronsen, D.: Joseph Roth und sein Lebenskampf um ein inneres Österreich In: Bronsen(Hrsg.) Joseph Roth und Tradition, Darmstadt(Agora), 1975, s.3-4
- 12) Klanska, Maria: Die galizische Heimat im Werk Joseph Roths, In: Kessler, M/Hackert, F.(Hrsg.) Joseph Roth, Tübingen(Stauffenburg), 1990, s.143
- 13) Bronsen, D.: Die Ambition des jungen Joseph Roth, In: TEXT + KRITIK(Sonderband/ Joseph Roth [Herausgegeben von H. L. Arnold]), München, 1982, s.32-34
- 14) 後にポーランドの作家となった。
- 15) 第二次大戦の際の爆撃

- 16) Wittlin, Josef: Erinnerungen an Joseph Roth In: Bronsen(Hrsg.) Joseph Roth und Tradition, Darmstadt, 1975, s.20
- 17) J. Roth Werke 1, s.1101
- 18) Bronsen, D.: Joseph Roth und sein Lebenskampf um ein inneres Österreich In: Joseph Roth und Tradition, Darmstadt(Agora), 1975, s.6-7
- 19) ibid. s.6
- 20) ibid. s.7
- 21) Koester, Rudolf: Joseph Roth, Berlin(Colloquium Vlg.). 1982, s.6
- 22) Kłańska, M. 前掲書 s.153
- 23) Roth, Joseph: Erdbeeren, In: TEXT+KRITIK(Sonderband/Joseph Roth), München, 1982, s.101
- 24) ibid. s.102
- 25) ibid. s.102
- 26) ibid. s.116-117
- 27) ibid. s.121 Bronsen の注記による。
- 28) キーベンホイアーおよびツヴァイク宛。Bronsen, D.: Zum >Erdbeeren< -Fragment In: TEXT+KRITIK-(Sonderband/Joseph Roth), München, 1982, s.123 参照
- 29) J. Roth Werke 5, s.665
- 30) ibid. s.657
- 31) ibid. s.655
- 32) Kłańska:前掲書s.152
- 33) Bronsen, D.: Joseph Roth/Eine Biographie, s.433
- 34) J. Roth Werke 5, s.660
- 35) ibid. s.672
- 36) ibid. s.673
- 37) J. Roth Werke 1 編者前書き参照
- 38) J. Roth Werke 5, s.657
- 39) J.Roth Werke 2, s.843
- 40) ibid. s.837

[参考文献]

- 1) Arnold, Heinz Ludwig(Hrsg.): TEXT+KRITIK (Sonderband/Joseph Roth), München, 1982
- 2) Bronsen, David: Joseph Roth/Eine Biographie, Köln(Kiepenheuer& Witsch), 1974
- 3) Bronsen,D.(Hrsg.): Joseph Roth und die Tradition, Darmstadt(Agora), 1975
- 4) Kessler, M./Hackert, F. (Hrsg.): Joseph Roth Interpretation Rezeption Kritik , Tübingen(Stauffenburg), 1990
- 5) Kesten, Hermann: Meine Freunde/die Poeten (Gekürzte Ausgabe), Frankfurt a. M.(Ullstein), 1980
- 6) Koester, Rudolf: Joseph Roth, Berlin(Colloquium), 1982
- 7) Joseph Roth 1894-1939<Eine Ausstellung der Deutschen Bibliothek>(Katalog), Frankfurt a. M., 1979
- 8) クラウディオ・マグリス 鈴木隆雄／藤井忠／村山雅人訳 『オーストリア文学とハプスブルク神話』, 風の薔薇, 1990
- 9) W. M. ジョンストン, 井上修一／岩切正介／林部圭一訳 『ウィーン精神』 1, 2, みすず書房, 1986
- 10) ロート, 平田達治／吉田仙太郎訳 『放浪のユダヤ人』, 法政大学, 1985
- 11) ロート, 池内紀訳 『聖なる酔っぱらいの伝説』, 白水社, 1989